本文の転載に当たっては事前に著者の許諾をとってください。

異類婚説話の比較

篠田知和基

§はじめに

「うぐいすの里」をもって日本の「あわれ」の情を論じ[1]、「鶴女房」の別れを「美女と野獣」の幸せな結末と比較して「別れの美学」をあげつらう[2]。あるいは、そのさいの人間から鶴への変身と、野獣から人間への変身とのちがいから、文化の方向性のちがいを考える[3]。さらには「猿聟」をもって日本人は異類を受け入れることを拒否すると言う[4]。いずれも「異類婚」の昔話の比較からの性急な文化論である。

たとえば、あと一日で人間になれるはずだったのに邪魔が入って、またはじめからやり直さなくてはならないと言って飛んでゆく白鳥の話が西欧にあるなら[5]「うぐいすの里」の特異性ははたして「あわれ」の感情なのかどうか。

あるいは「鶴女房」の別れは、なぜ「メリュジーヌ」の別れと対比させずに、「美女と野獣」に比較されるのか。

また、龍退治の話（AT300）が日本の猿神退治になり、猿聟にも猿神の零落した姿があるのなら、猿聟に対応する「龍聟」の話も西欧にあるのではないだろうか[6]。

そういった疑問ばかりか、「殺生石」の九尾の狐や「道成寺」の清姫、あるいは蛇にとりつかれて死んだ『霊異記』の某の女房の話[7]などを読めば、「あわれ」や「別れの美」とは程遠い世界も広がってくる。

さらに沢田瑞穂が中国の例を論じ、露伴の対髑髏型の話が多いと言う「冥婚譚」は、「仙境淹留交婚譚」から移行したものだとも言うのだが[8]、とすれば、異類婚には、死者や死霊も、天人や妖精と同じ資格で入ることになり、わが国の怪談の多くは「うぐいすの里」と同じ異類婚説話になる。昔話と怪談というジャンルのちがいによって語り口もちがえば話の雰囲気もちがっているが、人間と異種の結びつきの話にはちがいない。

そしてそれから転じて西洋の話を見ると、死者の恋だの、吸血鬼だのといった怪談にはこと欠かないが[9]、それ以上に、例の眠り姫のモチーフも、死者との婚姻のひとつであるとされている[10]。

また山姥が美しい女に化けてやってくる「食わず女房」を異類婚とする見方もある[11]。たしかに食わず女房があとで蜘蛛に化けてやってく

る話柄があり、これは関敬吾の『日本昔話大成』の「異類女房」のひとつ「蜘蛛女房」にちがいない。

そうやって見てくると、東西ともに、一見、婚姻譚ではなかったり、異類が出てこないように見えながら、その底に異類婚のモチーフを隠しているばあいも含めて、異類婚説話がきわめて広汎にわたっていることがわかる。その中から、「もっとも好まれているもの」といったとりだし方をすれば、たしかに「鶴の恩返し」と「美女と野獣」が並ぶかもしれないが、それは同じ話型の抽出になるとは限らないのは言うまでもない。

また「蛇聟」のごとく、神話、伝説、昔話の三つのレヴェルにそれぞれ語られている話を西欧の「蛇の王子」と比較するときには、各ジャンルのどの話型が「蛇の王子」に対応するのかをまず考えなければならない。共通の原話が伝説のレヴェルで伝播してきて、抽象化して昔話風になったかもしれないし、また逆に三輪山の大物主の神の神話は、世界的な昔話が一地方に漂着して、のち、その地方の豪族の支配圏が広がって神話化したものかもしれない。

蛇女房なら「メリュジーヌ」と「豊玉姫」が並行的な語りの構造を持っているが、こんにち知られている「メリュジーヌ」のテクストは、十四世紀の作家ジャン・ダラスの手になるものと、クードレットによる韻文のもの、そしてはるかに後世のドイツの民衆本とであって、これらをどこまで並行的に吟味しうるかはなはだ疑問である。すなわちわが国で言えばさしずめ『八犬伝』のごとき近世の文学的テクストと『日本書紀』のごとき古代のそれを、さらに口承説話の文脈で混ぜあわせられるかということだが、また一方では、昔話なら昔話に限定して、わが国にはあとを引かぬ別れの美学があるといったことを言うときに、はたして『道成寺』のごとき文学の世界を捨象してしまっていいものかという疑問もある。それにそもそも日本の「昔話」と西欧の「昔話」が対応するジャンルなのかということにも問題がある。

フォークテールやメルヒェンを「昔話」と訳すことにしたわが国の学界の了解は、必ずしも西欧の学界で承認されているわけではない。日本に「昔話」という「ジャンル」があるということもそもそも問題で、農民のあいだに「むかし」という概念があって、その伝承形態が西欧のメルヒェンと社会的に相同性を示していても、文学ジャンルとして、グリムのメルヒェン集に相当するものが日本の「昔話」であるとは限らない。

たしかに日本の昔話の中には、西欧のメルヒェンの伝来してきたものと目されるものが少なくないが、また、どうしても対応話型をアアルネ＝トンプソンの国際話型表に求めえないものもある。

また、神話、伝説、昔話と言っても、エスキモーやポリネシアのそれは、三者が分かちがたく混ざっていて、抽象化も固定化も少ないものが多いし、文化英雄の叙事詩と世間噺とが隣接するほど物語の時間の深度が浅いばあいもある。あるいは伝説が支配者の歴史になっているばあいもあるし、宗教伝説として経典化されているものもある。史書や経典のばあいには当然、本来の伝承に何らかの功利的な潤色があ

るであろう。日本の記紀伝説では（これも「伝説」と言って「神話」とは言わないことに注意を要するが）各地の風土記や逸文を比較することによってその種の政治的潤色を排除して読む読み方がかなりできるが、エスキモーの伝承の利用にあたって、そのような〈テクストクリティック〉はほとんど不可能であろう。

それに、エスキモーの「蟹と結婚した女」、日本の「鶴女房」、フランスの「美女と野獣」といったテクストを並べて小沢俊郎は自然民族と文化民族のちがいを指摘しているが、[12]「物語」自体が自然や動物と共存する世界で語られているか、自然を切り離した都市型の文化世界で語られているかのちがいはあっても、そこから各民族の心情の相異までは論じられないし、さらに物語の文学的な比較はできないのは言うまでもない。エスキモーの社会が都市型になっていけば、「蟹と結婚した女」の物語もちがったように語られることが考えられ、物語の語られる社会的環境、文化の様態、その物語の機能（宗教説話、史伝、むかし語り）を異にするものの比較は、物語自体の比較ではなく、その成立基盤の比較になることに注意をしなければならない。「話型」としては、神話から怪談、あるいは文学作品まで巾広い「説話」の全体に目を通す必要があり、その中で、個々の物語の比較については、ジャンルや機能の相同性を前提とすべきである。

日本と西欧の「話型」の比較でも、「昔話」にこだわっているとちがいがめだつが、ギリシャ神話まで含めた神話の世界や、『雨月物語』やカフカの『変身』まで含めた文学の世界にも目を向けると、さきの性急な結論にも留保が必要なように思われてくる。[13]

同一ジャンル内での比較なら、他のジャンルの話型に目を向ける必要はないはずだが、そのばあいには日本の「昔話」と西欧の「昔話」が同じジャンルでなければならない。オシラ祭文につながる「蚕神」の話を『日本昔話大成』は異類婚に分類しているが、西欧では、これは養蚕の起源を説く伝説か、あるいは蚕神信仰の神話かとみなされるであろうし、中国では、『搜神記』などの話の翻訳として、文学、それも比較文学の問題とされるだろう。とすると、少年の「旅立ち」、「冒険」、「帰還」、を「怪物退治」、「王女救出」、「結婚」のモチーフにあわせて、「警告」と「背反」そして「超自然の援助」の反復のうちに語ってゆく西欧のイニシエーション型魔法昔話、アアルネ＝トンプソンの分類表の三〇〇番から七〇〇番台までの物語の総体と、日本の「隣りの爺」型の勧善懲悪譚の物語の総体とは当然のことながら不一致を示すはずである。

もちろん、主として異常出生をした建国英雄型の少年の他界冒険譚はわが国でもあることは「桃太郎」や「一寸法師」を見ればあきらかである。また欲深な人間が隣人のまねをしてひどい目に会う話も、西欧にもあることは「コブ取り爺」が東西に共通していることや、「聴耳型」の物語の存在からもうかがえる。ただ、同じ話が笑話や奇譚（ノヴェラ）として語られるのと、老人の知恵として道徳話的に伝えられるのとではまるでちがっている。

「シンデレラ」型の「継子話」だと、話の展開には相異はあって

も、話型として、またジャンルとして、東西に共通性は見られる。不幸な主人公の「幸せな婚姻」の話はほぼ東西同じ文脈で語られる。しかし、その婚姻が異類とのあいだで成立するばあい（あるいは破綻するばあい）となると話は同じではない。

日本の民俗学者が西欧との比較をこころみるときには、まさにこの「異類婚説話」が好んでとりあげられ、小沢俊郎のごときは『世界の民話』を「人と動物との婚姻譚」の副題で語りだす。その結果は洋の東西の相異がことごとに強調される。たしかにわが国の「昔話」で、現実世界にはありえない驚異を語るさいの典型は「人と動物との婚姻」のそれにちがいない。異類婚の昔話は、わが国の昔話の中でも大きな位置を占めている。しかし、西欧ではたしてどうなのだろう。アアルネ＝トンプソンの分類表でも「超自然の配偶者」という部立てはある。「蛙の王さま」や「白猫」、あるいは「美女と野獣」である。いずれもかなりの数の類話を持ったポピュラーな話型である。ATの400から451までがこれにあたる。そしてこれらの話を日本の、とくに『大成』の「異類婚姻譚」の部の話と比較をすれば、小沢の指摘のとおりの相異が表面的には出てくる。

しかしその比較でも指摘されるように、「白猫」などは魔法によって動物に変えられていた人間が、魔法の解除によって人間の姿をとりもどして幸せな結婚をする話で、動物と人間が交わる異類婚姻の物語ではない。魔法変身と、その変身を解かれた人間同士の幸せな婚姻の話である。そもそもが、このAT400番台の話は、魔法、それも変身魔法を中心とした魔法昔話であり、婚姻のモチーフは、物語にハッピーエンドをもたらすための道具でしかない。そして言うまでもなくわが国には「魔法」の伝統はない。[14]

しかし西欧世界に日本のような異類婚説話がないかと言うとそんなことはない。河合隼雄は「ヨーロッパでは本質的に異類婚は成立しない」[15]と言っているが、これは取りあげるテクストの範囲が限定されていて、かつ、日本のそれとずれているための誤解である。ヨーロッパでも神話や伝説では神や妖精が人間と結ばれ、しかし、やがては別れてゆく。神話の中には神が動物に姿を変じているものもあるし、民族によっては動物神が信仰されているところもある。そして日本でも「蛇聟」や「天人女房」などは、異類婚よりは神婚に近く、少なくとも三輪山神話などに接続していることは知られている。すなわち神話的昔話である。

§日本の異類婚説話

わが国の昔話をどこで神話と区別するかは難しいが、一応、柳田民俗学によって把握された口承文学の体系に属するものを昔話とする。その柳田は『日本昔話名彙』で「幸福なる結婚」の部立てをして「天人女房」、「鶴女房」、「狐女房」、「魚女房」、「龍宮女房」、「蛇女房」、「蛇聟入」、「猿聟入」などをあげている。

その後、関敬吾は『日本昔話集成』、そして『日本昔話大成』で

「異類聟」と「異類女房」を分け、「異類聟」では、「蛇聟入」をまずあげ、それをさらに「苧環型」と「水乞型」に分類し、その亜型として「河童聟入」、「鬼聟入」、「猿聟入」をあげている。

「苧環型」と「水乞型」は、水神の「来訪型」と「契約型」のちがいだが、いずれも雨乞いの農耕儀礼の物語化にはちがいない。[16] なお、「水乞型」には山の池で蛇を退治したあと、山姥から姥皮をもらって、長者の家で下女になる「姥皮」が付け加わるものがあって、これを「姥皮型」として分出することも可能であろう。

その他に関は「蟹報恩」、「蛙報恩」、「鴻の卵」などをあげているが、いずれも怪物としての蛇が娘にとりつくのを、かつて助けられた小動物が恩返しに救ってくれる話で、「蛇聟」の神性が後退し、怪物性が強くなったものの、蛇聟は蛇聟である。

蛇に一見かかわりがないのは猿聟、犬聟、蚕神由来（木精聟は「憑きもの」の一種で、婚姻譚とは言いがたい）で、いずれも異類の姿のまま人間と交わっている。

このうち、犬聟として語られるものは、犬と夫婦になっていた女が、犬を殺した狩人と再婚し、後にその事実を知って夫を殺す仇討ち譚となっているが、中国のバンコ神話ではどこからかあらわれた犬が娘と交わって一族の始祖となっており、同じ中国の猿祖伝説と通じている。わが国でより広汎に語られる蚕神由来も馬娘婚姻譚として中国で広く語られており、いずれも特異な一族の始祖伝説とみなされる。ところでそのうちで、猿と馬は『河童駒引考』で石田英一郎が説いたように水神信仰の変化した形として共通している。そしてそのいずれも蛇―龍と互換性を持っている。日本の猿神退治はヨーロッパの龍退治と同じであるとも説かれている。[17] あるいは、猿は春に里に迎えて田の神とし、秋に山に送って山の神とする、季節によって居所と機能を異にする神であり、農耕豊饒の神である。すなわち、猿も馬も水神としての龍蛇神の異相である。犬だけが直接、田にも水にもかかわりがないが、犬祖伝説と猿祖伝説の互換性もあり、また「八犬伝」に見られるごとき人馬通婚譚と同じモチーフ（武勲の報賞として娘を欲すること）の存在もあり、この猿・馬・犬は、いずれも蛇聟譚の語り換えとみなされる。[18]

ただし、そこでは、本来、神として崇められていた蛇や犬や馬や猿蛇、あるいは、蛇や犬や、その他の姿をとって地上に来臨していた神が、やがて恐ろしいもの、忌むべきものとして忌避されるようになっていった過程がうかがわれるのであり、神の来臨の物語が化物退治譚になる一方、死体化生神話的な新しい神話への脱皮も見せているのが注目される。

木精は動物ではないというので除外したが、これも中国の志怪小説では妖精ないし死霊であり、最終的には神であろう。[19]

異類女房のほうではやはり蛇が筆頭に来るが、これは「蛇の目玉」型の母子別離譚で、異能の子孫を残す点で狐女房と互換性を示している。狐は稲荷神であり、穀霊であり、雷神＝蛇神と本来互換性を持っている。ただしこの蛇女房、狐女房の本来の姿は「ワニ」とも「蛇」

とも言う豊玉姫であろう。昔話では龍宮女房であり、蛇の異相を避ければ、魚女房、蛤女房である。いずれも報恩型である。

一方、天人女房となると、魚女房型の報恩のモチーフは見られないが、それだけ本来の姿に近いものとも見られないことはない。鶴女房は天人女房の変型であることは、汎世界的分布の白鳥乙女を持ちだすまでもない。[20] ところで天人と龍宮女房、あるいは海神は海と空のちがいこそあれほとんど同種のものと考えてもいいだろう。天人も衣を脱いで水浴びをするのだし、天の畑で瓜を切れば大水が出るのである。雨水を司る水神として、龍宮の乙姫の姉妹と考えることにさして無理はない。

「天人女房」は西日本では多く「七夕型」で語られ、東日本では「笛吹聟」の展開を示すとされている（桜井徳太郎他）が、相手は同じ天人でも、結びつきのきっかけが一方は羽衣の奪取であり、他方は、笛の功徳であって心が通じているか否かに大きなちがいがある。また、「笛吹聟」の後段、鬼に女房をさらわれる話は、第二の異類婚（鬼と天人）にあたり、この二つの話型はやはり別種のものとしたい。

ほかには蛙女房と猫女房があり、猫のほうはいささか特殊だが、蛙は、蛇との食うもの食われるものの相互可逆的互換性のほかに、やはり、水棲の妖精的性格を持っている。

特殊であるという猫女房は、飼猫が恩返しをしたついでに伊勢まいりをして人間になる話で、同じ猫の西洋の「白猫」よりは、わが国の猫檀家などに近い報恩譚で、西洋なら、むしろ「長靴をはいた猫」を思わせる。[21]

稲田浩二は彼の編集した昔話集の異類女房の項[22]で、「人界に住む人類以外の、あらゆる異次元界の存在が含まれる。これらの女性たちは例外なく、みずからの意志で人界を訪れ、男と夫婦になって婚姻生活をいとなむ」と言っているが、「天人女房」や「白鳥乙女」は「みずからの意志」で人間の嫁になるわけではない。また、それが男の側の策略や祈願の結果ではないときでも、天界の掟に背いた罰などのばあいもあって、すべてが自由意志というわけではない。むしろ、ほとんどが超越的な天界や神の秩序の要請であって、来訪する天人のとる動物種の種類も、必然的に限定されている。男性なら雷神の系統、女性なら龍宮神か穀霊の系統である。そして、この婚姻から子孫が生まれれば、当然、武勇に秀でた建国英雄の始祖伝説となる。その中で犬聟については、わが国の農耕文化以前に伝来し、やがて蛇神系統にとってかわられた犬祖伝説の変化したものであろうと説く（稲田、前出書）のは正しいかもしれない。しかし犬聟と馬聟に同じ語り方があることもあってこのあたりは速断しかねるところである。[23]

関敬吾の「大成」では異類婚はこれくらいだが、ほかに前述の「うぐいすの里」と「食わず女房」は落とすわけにいかない。とくに「食わず女房」は最後に蜘蛛になるからというだけではなく、山姥自体が山の神であり、異類なのだ、神の来訪が福をもたらすとは限らないこと、神には和魂としての相と荒魂としての相があることなどを考えれば、「食わず女房」もまちがいなく異類婚のひとつである。とりわ

け、はじめは「物食わぬ」女が欲しいと祈願して、そのとおりの女が来る。しかし、見てはいけないという禁止を破った結果、怖ろしい目に遭う。「物食わぬ女」はその形状からして、魚類か蛙か蛇であろうと、臼田も考えている。[24]であればやはり、水の精であろうし山姥という呼称からすれば山の精であろう。その神の一種が、はじめは福を与えにやってきたのに、タブーをおかして、厄神に転じたと考えられる。厄神としては蜘蛛の姿に変ずるのだが、蜘蛛は水神で「水界の主」と考えられている。

すなわち水神としては雷神、龍神から直接出てくる蛇と、龍宮神の想像から導かれる魚類、そして擬人的な河童がいるほか、山上の湖に水浴に来る白鳥や天人がいて、その筋にうぐいすなどの可憐な鳥がつながると考えられるが、そのほかに、姿形、棲息地、生態からは水とつながるところの少ない蜘蛛がいて、これがやはり異類婚の配偶者になることがわかる。ただし、賢淵伝説などにあるように蜘蛛は人を水中へ引きこむ邪神・水神である。つまり蛇、河童、蜘蛛と、同じ水神でも福より災をもたらす相において語られた厄神退治の物語であり、一方の魚、亀、蟹、あるいは白鳥、鶴は福をもたらすべき相のもとに語られる天人来訪の物語である。その間にあって、災、あるいは神の怒りの相が極限化すれば鬼聟や山姥の食わず女房になり、福徳の相の究極は笛吹聟などの天人女房である。

§フランスの異類婚説話

以上のような日本の異類婚に対して、フランスを中心とした西欧で「超自然の配偶者」の物語とされるＡＴ４００番の物語では、前述したように「蛙の王さま」も「白猫」も魔法にかけられた人間の話で、「異類婚」の色彩は少ない。たしかにわが国でも、鶴や魚やあるいは狐や蛇は人間の姿になって人間のもとに通ってくる。そのかぎりにおいては人間と人間の結びつきだし、兵庫の犬聟では「犬だけえ子も出来りゃあせんだし」[25]と、暗に、性的な異類婚が否定されている。それがなるほど常識的な物の見方である。しかし、本来の昔話は、常識ではありえない驚異のおこる世界である。異類と人間とが、姿を異にしたまま交わって子を作ることだって、昔話の世界ならあってもふしぎはない。そしてたしかに「熊のジョン」では、熊にさらわれた女が熊の子を生むところが話の発端になっている。中国へ来れば、この種の熊聟、虎女房の類は珍しくはない。[26]

そして西欧でも「動物と結婚した女」（ＡＴ５２２）は題名そのものの話だし、「青髭」のカナダの話では、男が馬や熊になっている。[27]異類との婚姻は不可能とはされていない。これは神婚神話だが、レダは白鳥と交わってヘレネを生み、ダナエは黄金の雨によってペルセウスを生む。あるいはパシパエはポセイドンの牛と交ってミノタウロスを生んだ。ポセイドンの牛はもちろん水神の本来の姿である。そしてゼウ

スの種々の変相も、セメレーのもとにあらわれたときの本来の姿、雷を手にした雷神の諸相である。黄金の雨とは稲光をともなった雨だし、白鳥は天がける水神の姿である。あるいは蛇女エキドナはテューポンと交って、キマイラやヒュドラを生むが、ほとんど水神的な龍の系統である。また、海神ポセイドンはペガソスの父となるが、彼は馬か牛の姿がその本来の姿である。

こういったギリシャ神話とヨーロッパ文化をつなぐものとしては、まさに蛇女メリュジーヌがある。もっともこれは豊玉姫や鶴女房と同じで、人間の姿で人界を訪れ、福をもたらしたのちに、「見るな」の禁の背反によって天に去ってゆく。婚姻は人の姿で行われ、蛇身があばかれれば、もはや、婚姻はつづけられない。かくてメリュジーヌは、神婚よりは昔話の世界に近づいているわけだが、それでもその出現の場所は泉のほとりであり、その仕事は荒地に水を湧きださせることだ。蛇身になっているのも水浴をしているときで、これが水の精であることに疑いはない。

ヨーロッパで人間と交わる妖精では、鵞鳥足の山の女がいる。[28] 彼女が消え去るのは、床に灰をまいておいて、鵞鳥の足の足あとを見てしまうからだ。彼女たちが住んでいるのは山の上だが、鵞鳥本来の住みかは水辺であろう。メリュジーヌも鵞鳥の姿で舞い戻って、残した子供たちに乳をのませたと言う。

妖精は本来、村里近くの山や川や森といった〈近い異界〉に住んでいて、人界を訪れては福をほどこすが、人間たちがしかるべき対応をしないと怒って立ち去ったり、逆に災いを送ったりすると考えられている。中には家や馬小舎に住みつくものもいて、男も女もいるが、鵞鳥足や、矮小な背丈、尻尾、とさかなどによって異類性を示している。イギリスでは〈妖精物語〉がさかんになったので、種々に文学化された妖精像が生みだされたが本来は地霊、家霊、山神、水神のたぐいで、そのありようはわが国の蛇神、猿神や天人、鶴女房などと同様であろう。フランスでは前記の鵞鳥足の妖精がレーヌ・ペドーク（鵞鳥の女王）やマ・メール・ロワ（鵞鳥おばさん）になり、さらに蛇体をとってメリュジーヌになったほか、家霊、地霊のたぐいは小妖精（リュタン）になったと思われるが、この小妖精については、馬小舎の妖精として、馬、そしてそこからさらにさかのぼって水神につらなる性格があろうということは前稿で見たとおりである。

すなわち鵞鳥妖精もメリュジーヌも、馬小舎のリュタンもみな水の霊であり、その水の霊が人間の男女に惚れるという筋書が、多くの妖精伝説に語られる。

これがオカルト学になると、妖精を空気の精のシルフ、水の精のオンディーヌなどと区別しながら、いずれも人間との結びつきによって、地上の生を得ることを願っている浮遊霊であるかのように考える。[29] 道士はカバラの術によってこれらの自然霊を使役し、自らの用を弁じさせるという。カゾットの『悪魔の恋』でも、カバラ道士ソベラーノが、シルフに命じてパイプを持ってこさせて、若き主人公アルヴァーレを驚かせるところがある。ただし、その後の展開を見ると、ソ

ベラーノもそのシルフにパイプ程度の身辺の持ちものを運ばせるくらいで、それ以上の大したことはできないようで、このあたりは、わが国の陰明道の道士たちが式神を使って身辺の用をさせることとほぼ軌を一にしている。

ただし、わが国では、これら式神を用いる行者や道士の術が、呪術文化的環境で、村の迷信や憑霊信仰、あるいは狐憑きなどの憑きもの症状の方向へ発展してゆくのに対し、フランスでは、キリスト教により精神文化の統合が進んでいて、自然霊や妖精たちがいち早く「悪魔」というキリスト教的概念に変化してゆくことがちがっている。

そこから、わが国の狐憑きにあたるものとしては悪魔憑きがフランスでは報告されることになるのだが、それは昔話でも同じで、自然霊や動物神の姿をとった妖精は地域伝説では姿をとどめても、昔話ではかなり早い時期に姿を消して、一律に悪魔の名を与えられることになる。そして異類婚でも悪魔の花嫁のモチーフが目立って、動物婚の様相が後退する。

ただし、わが国の異類の配偶者がすべて悪魔になるわけではないのは当然で、わが国の存在では鬼や山姥がその傍らにあり、フランスでは、やはり人食い鬼や魔法使いが悪魔の周辺にいる。しかし、フランスの昔話の配偶者としては、人食い鬼や魔法使いがなることはまずない。福を与える妖精としてではなく災いをもたらす邪神としてでも、青髭型の悪魔が娘をたぶらかして異界へ連れてゆくことはあっても、人食い鬼にはそのような艶福は認められないのがふつうである。人食い鬼は一般に愚純で半ば滑稽な存在とされていて、艶福はもちろん本当の恐怖からも程遠い。

恐怖はむしろ怪物や妖怪によってもたらされる。人身御供にされた娘の前に、地ひびきをたてて怪獣がやってくる。呪いをかけられた王女は、夜毎、悪鬼に責めたてられる。

§「龍退治」と「龍の花嫁」

西欧ではまさに、そういった、人身御供やさらわれた王女の物語の中に、異類婚のモチーフが隠されている。神話においては神々が、伝説においては妖精が演じた超自然の配偶者の役割を、昔話において演ずるのは、白猫や蛇の王子ではなく、王女をさらった龍（300A）であり、あるいは、王女を手に入れて魔法をかけて城の中にとどめておく悪魔（呪いをかけられた王女＝AT307）であり、その王女の番をする幽鬼（AT401）である。

301番は、「甲賀三郎」的な物語で、地下世界に下りてゆくと龍の妻になっている王女がいる。これを「妻」と明示するテクストは必ずしも多くはないが、小沢の指摘をまつまでもなく、その関係は明瞭である。[30] さらに、小沢は、その龍を300番の龍と比較して、300番のほうはいけにえを呑みこもうとする殺害者で、配偶者ではないとするが、龍が娘を食べたとする伝承は存在しない。そもそもギリシャ神話の「アモールとプシュケ」でも、神の託宣によって娘は怪物への人

身御供として山上に置き去りにされるのだ。ところが娘が気がついてみると、食い殺されるどころか手厚いもてなしをうけるのである。これはわが国の猿神でも同じだが、食べるためならいけにえの男女は問わないわけで、美しい処女でなければならないのなら、まず性的ないけにえと考えてさしつかえない。それにAT300番のグループ(300〜311)では、300番以外は、いずれも怪物や悪魔に王女がさらわれた状態がかなり長くつづいている。それも大半は昏々と眠っているか、魔法で動物に変えられているかで、救出にやってきた主人公に対して、地上的な応待はできない状態にいる。これはわが国の『霊異記』の犬聟の話の女と同じように、他の男とは話をすることも許されない状態なのだと考えてもいい。いずれにしても、ふしぎな昏睡状態や、動物身、あるいは、吸血鬼性などは、王女が異界の風に染まったこと、異類との接触で、〈汚れ〉を帯びていることを示している。

王女らをさらったのは龍か悪魔である。そのばあい悪魔なら青髭的な詐術を弄したと考えられるが、龍のばあい、人身御供の娘をさらってゆく以外には考えられない。そしてその結果、子を生んだという伝承はないが、自ら吸血鬼になったり、死者の国としての異界にふさわしい死を思わせる眠りに落ちていたりするのは、たとえば吸血鬼なら、吸血鬼の夫の接吻を受けたからだし、眠り姫は、死者の抱擁を受けたからだと考えられる。そこにまず第一のレヴェルの異類婚がある。ついで、そこに救出者としての主人公が登場する。この主人公と王女とが、このあとも迂余曲折を経てではあるが結ばれる。が、その

〈迂余曲折〉自体が、この結びつきの異類結合性を示している。同類同士なら、それほどの障壁を越えなくともいい。

〈迂余曲折〉には「甲賀三郎」型の、地上で待っていた兄弟や仲間が、先に引きあげた王女を奪ってしまうという、二度目の王女略奪のモチーフも含まれる。「龍退治」のばあいの偽の救出者である炭焼きも同じである。昔話には二重性、反復性は珍らしいことではなく、冒険旅行のばあいは、一回目は予備試練で、そのとき獲得した呪物をもって二度目の本試練に臨むことが多いともされるが、この王女の二度目の略奪は、むしろ一度目の略奪の延長、ないし確認の意味を持っていると考えられる。龍はいけにえの王女を目の前にしながら、娘をものにする前に少年によって殺されてしまう。しかし、娘を狙う邪悪な心は、龍なきあとは、その龍の頭を切りとって持ってゆく炭焼に引きつがれる。邪悪な存在に奪われるべき娘の受難はまだ終っていない。龍の邪まな欲望とその頭とは炭焼きによって運ばれて、〈奪われた花嫁〉の悲劇を完遂させようとする。事実、死せる龍の分身とも言うべき炭焼きは王女の花婿として正式に認知されて、まさに結婚の式を挙げるところまでたどりつく。

ここで、なぜ王女は真実を明かさないのかという疑いが起こる。真の救出者は炭焼きではないことを知っていながら、そのことをだれにも明かさないというのは何と言っても不自然だからだ。その不自然さの解決法としては娘が気を失っていて、悪者によるすりかえを知らなかったことにするという手がある。これは〈眠り娘〉と同じモチーフ

で、神に捧げられた娘は、一旦、死なねばならないという考えにも一致する。ただしこれも、少年と龍との戦いのあいだ、終始気づかずに寝ていたとすると、〈異常な眠り〉に近く、不自然さは解消されない。

二番目の解決策は、炭焼が王女を脅して、真実を言わないという誓いをさせることだ。この場合が一番多いのだが、悪者相手の〈誓い〉に縛られて、当の悪者との結婚を承知するというのもやはり不自然にはちがいない。悪者の脅迫による誓いならふつうは無効と考えられるものだ。無効でないなら、相手がただの悪者ではなく、神そのものか、神の威光をかさに着たものかででもなければならない。そこで考えられるのは、人身御供自体が、ただの怪物への供物ではなく、龍蛇神への雨乞いのための人身御供の類ではないかということだ。炭焼きはそのばあい、神の祭司のようなもので、はじめから彼が〈神託〉を告げて娘を要求したのかもしれない。いずれにしても龍蛇神の神威と意志を分与された関係者であるなら、娘は人身御供の託宣にも従ったように、いま、偽誓にも従わなければならないかもしれない。このばあいは龍と炭焼きの一体性、連続性がさらに確認されよう。

ところが、そうやってすりかわった花婿は、結婚の式の直前まで行って、またもや涙を飲んで引き下がらざるをえない。もちろん、遍歴を終えて帰ってきた少年が証拠の品をもって、炭焼きの偽誓をあばくからだが、そのときの証拠の品に王女のハンカチや指輪は必ずしもあるとは限らないが、必ずあるのは龍の舌で、少年が龍退治のあと立ち去る際になぜ、そんなものを切りとっていったのかも不思議だが、炭焼きは、その舌をつきつけられて兜を脱ぐ、龍の舌はこれがなければ結婚が遂行できないものとして機能するのだから、もちろん性的象徴である。[31]

〈迂余曲折〉は、〈眠り姫〉に眠っているあいだに子をはらませた少年が、そのまま遍歴の旅をつづけ、子を産むとともに目を覚ました王女が、「真実を語るものをただで泊める」宿屋を開いて父さがしをするというプロセスを経るばあいもある。このばあいは龍退治の性的な意味ははるかに明瞭だが、それ以上に〈眠り姫〉との事実上の〈婚姻〉が成立している点が注目される。

307番[32]の「呪われた王女」は、吸血鬼となって夜な夜な地上にさまよいでる王女を、三日三晩通夜をしてやって悪魔の呪いから解き放ってやる話だが、まず最初は悪魔の花嫁としての異類婚であり、つぎは、悪魔との契約の結果、自身悪魔性を帯びるに至った女（獣のばあいも少なくない）と三日三晩をともに過ごす、少年と異類女房の共寝の物語である。これは上品な語り口だと、地中に埋まっていた王女が、三日の試練を少年がくぐりぬけるにつれて、まず胸まで、ついで腹まで、そして最後は全身をあらわすと語られるが、より露骨な語り口だと、狐などの獣になっている王女と三日三晩床をともにすることになっている。その際に当然のことながら「見るな」の禁忌があって、異類の姿を見てしまうと、王女はガラスの山に逃げ去ってゆく。

これも魔法で獣になっていた女と少年との結びつきだと言うのなら「白猫」のタイプの物語だが、「白猫」とちがうのは異類の姿のままで

枕を交わすことであり、また、異類の相手を見てしまった結果として相手が逃げ去るのを追いかけてゆくという、「アモールとプシュケ」の神話と同じモチーフがある点だ。異類のままでの接触なら、「蛙の王さま」でもある程度はあるが、そこでは王女は蛙と床を共にすることをいっときたりといえども耐えようとは思わず、ベッドに入りこんできた蛙を壁に叩きつける。[33] これはわが国の「田螺息子」の魔法解除と同じとされているが、斬首、釜ゆで、圧殺などの暴力加害によって魔法変身が解けるのは蛙だけではない。「白猫」もその点は同じで、それに対して、三日三晩の試練をくぐりぬけたのちの魔法解除は同じではない。これはやはり「アモールとプシュケ」の昔話版に近いと言えそうだ。[34]

§「申し子」譚その他

その原因が魔法変身であれ、異類の姿となったものと夫婦の関係をつづけるのは、「ラプンツェル」（310）のニヴェルネ版で、ここでは妖精の呪いでロバに変えられてしまった娘が王子とともに暮らしている。

ところでここでも、異類婚の二重性があるのは、ラプンツェル（ペルシネット）が妖精の申し子だからだ。309番の王子は悪魔の申し子であり、316番の王子は水の精の申し子である。申し子と言うのは神に願って授けられる子供だが、通常は夫婦の営みによらない異常出生をする。田螺は道ばたに転がっている。〈すねこたんぱこ〉は壓にできたはれものの中からとびだす。西欧の物語で、悪魔や妖精の申し子、ないし名づけ子とされるものは、悪魔や妖精と交わって出来た子の出生についての迂言法的表現である。そのような異類の血を半分うけついでいる存在だからこそ自分も異類婚をするのだという説明もされうるだろう。

そもそもが竜蛇神のメリュジーヌの物語にしても、ジャン・ダラスのテクストでは、母親のペルシーヌが人界に降りてエリナス王と結ばれてメリュジーヌを生むという前段がある。そこでもペルシーヌは、エリナスの禁忌背反によって人界を去らなければならなかった。異類婚は親の代から受けつぐ世襲の呪いでもあろうか。であれば異類の申し子が自分も異類婚をすることに何のふしぎもない。

たとえば314「しらくも」、325「魔法使いの弟子」、433「蛇の王子」など、いずれも異類に願って出来た申し子が長じて異常な婚姻をしようとする（325には婚姻のモチーフはないが）物語である。

これらはいずれも申し子が男子のばあいだが、313番「悪魔の娘」では美しい娘である。このばあいには娘と悪魔の父子関係ははじめから自明なことのように語られているが、むしろこれが実の娘ではなく、名づけ子か申し子ではないかと思われるのは、「親に似ぬ子は鬼の子」という諺のまさに逆で、鬼の子ながら親に似ていないからだ。あるいは「悪魔の娘」と言っても実はさらわれた娘かもしれな

い。でなければ主人公と一諸になって悪魔のもとを逃げだす理由がない。

しかし、実の子であっても名づけ子でも、あるいはさらわれた子でも、異界逗留と異種との接触は（あるいはよもつへぐいは）、地上の存在に非地上性の刻印を押す。異類とは生物学的に異種であることを必要とはしない。異界の住人なら異類なのだ。であればこそ、この娘は悪魔の家からの逃走行のあと、地上に着いてもすぐには主人公の妻として認知されることができない。まずは村ざかいでとどまって、主人公を先にやる。そして主人公が家族のもとでだれとも接吻をしないで戻ってくればいい、もし、だれかと接吻をすれば彼女のことは忘れられる。そして事実、少年は家族との再会に我を忘れてみんなと接吻をする。これが地上社会への復帰の儀式である。少年は地上に認知され再び受け入れられる。と同時に異界でのできごとはすべて記憶からぬぐいさられる。少年には異類性、異界性の痕跡がそれほど強くなかったからであろう。ところが村ざかいで待ちつづける娘のほうはそうはいかない。彼女を見知っているものは一緒にやってきた少年だけである。その少年に忘れられてしまったら、娘は永遠に村ざかいで、いかなる存在理由も否定されてさまよっていなければならない。他界の存在にはこの世で住むべき場所がない。彼女は少年に思いだしてもらうために必死の努力をする。竹取姫の求めた宝のような、珍しい品物[35]、彼女が異界から持ちきたった品物で少年のいいなづけの注意を引く、そして、その品物とひきかえに少年の部屋で夜を過ごす許しをもらう。しかし最初の二晩は少年（と言ってももう立派な大人のはずだが）が眠り薬のせいでぐっすり眠りこんでいて、娘がいかにかきくどいても効果がない。〈眠り姫〉と同じようなふしぎな眠りである。異類間の障壁を〈ふしぎな眠り〉が象徴する。あるいは魔法にかけられた状態と解してもいい。〈ふしぎな眠り〉、または魔法は、「呪われた王女」の傍らでの三日三晩の通夜と同じく三日目には解除されて、悪魔の娘は主人公に認知され、人々にも披露されて、正式にこの世の人間として、また主人公の妻として受け入れられる[36]。

悪魔の娘、ないし悪魔の花嫁は、まず異界での悪魔との婚姻があったと仮定すれば、人間が異類と結ばれ、その婚姻によって異類性を獲得したのちに救出者とふたたび異類婚をしたことになる。悪魔との関係が実の親子であれば、はじめから異類であり、主人公との異類婚があり、ついで、眠っている少年との異類婚のしなおしであったことになる。いずれにしても悪魔の家にいた娘は異類である。最後に悪魔が嫁選びをさせるときに、娘たちを鴨に変えて池に泳がせているのは、娘の異類性をきわだたせる。

これらの異界の住人との婚姻が「白猫」や「蛙の王さま」とちがうのは、最終的には異界間の障壁解消の努力が必要とはされても、その前提として異類間の婚姻が成立していることだ。地下の城で眠っていた王女のばあいには子供までできてしまう。悪魔の娘と少年のあいだにも、親子のきずなも、異文化障壁もへだてることのできないつながりができてしまう。これに対してＡＴ４００～４５１の「超自然の配

偶者」で、異類の姿のままでの結びつきが認められるのは「青髭」と「蛇の王子」のみである。しかし「青髭」は「悪魔の花嫁」あるいは「奪われた王女」であろう。[37]「蛇の王子」は申し子である。申し子としては水の精や海の精の申し子もあるが、誕生のときの約束に従って異界へ赴く話と、異類の姿をまとって成長し、結婚によって人間になるばあいとがある。「蛇の王子」は後者で、はじめの二回は怪獣の姿のまま初夜に花嫁を殺してしまうが、三度目には花嫁の優しさに接して、相手には危害を加えない。その後、花嫁は、夫が夜ごと美青年になることを知って蛇の皮を焼き捨てる。それが早すぎて、もう少しで人間の姿に戻るところだったのにと言いながら他界へ飛び去ってしまうばあいと、そのまま人間になるばあいがある。ただ、どちらにしても最後は幸せな結末に終る。というより幸せな場面で物語をしめくくる。長い人生のどの局面を切りとるかで、幸せな婚姻の物語にも不幸な離別の物語にもなりうる。ヨーロッパの昔話はハッピーエンドを原則とし、日本の昔話は離別の情に満ちている。しかしヨーロッパでも伝説は多く悲劇的である。日本の昔話がヨーロッパでは伝説的であると解されるゆえんである。変身のモチーフについても、白猫が人間になり、一方、女が鶴になって飛び去ることをもって、方向が逆であると言うが、離別ではなく婚姻のレヴェルで見れば、鶴女房も、鶴が人間になってやってくる。また白猫も、一旦結婚したのちに、夫がなんらかの禁忌背反を犯せば、ふたたび白猫になって去っていかないという保証はない。たしかに白猫の本性は人間であり、鶴女房のそれは鶴だというちがいはあるかもしれない。しかし、仏教的転生観のしみこんだ日本の精神風土、とりわけ昔話の語られるそれにおいて動物と人間のあいだには互換性があり、鶴女房ももとは人間であったかもしれない。

§「食わず女房」その他

以上を見ると、レダと白鳥の神話、メリュジーヌ伝説、申し子婚姻譚、奪われた花嫁の物語等々に西欧でも異類と人間の結合の物語は広く存在する一方、わが国でも水神信仰の痕をとどめる神婚譚が、蛇聟、鶴女房、食わず女房、田螺息子などに変化しつつ語られている。それらの物語の変異の様相はほとんど同じと言っていい。ちがうのは、西欧では神話と伝説と昔話がはっきり分かれており、昔話では異類婚のモチーフが隠蔽されていること、魔法変身のモチーフが付加されていることなどだが、神話でも、ギリシャ神話は擬人神の動物への変身を語るのに対し、わが国では、動物神の人間への変身が語られている。(これは「鶴女房」と「美女と野獣」の相違とは逆の形である)。

しかし、これもあえて言えば動物神神話の段階と擬人神神話の段階があって、それぞれの物語があるとも考えられる。西欧世界でもギリシャ神話以前は動物神神話があり、ギリシャの神々でもオリュンポス神族以前の神々は、動物神か自然神のおもかげをとどめている。たとえばポセイドンは古形では牛か馬が本来の姿であったとも思われる。

またわが国でも高天原系の神話には蛇神等の動物神はほとんど登場しない。[38]

とすれば、一、動物神が人間になって地上にやってくる神話、二、擬人神が動物や器物（丹塗りの矢など）になって来る神話、三、異界から来た動物の子孫の繁栄を語る動物始祖譚、四、神に願って与えられた異類の子供が婚姻と同時に人間になる申し子譚、五、人身御供を要求する怪物に奪われる女の異界での生活と、その救出譚、[39]六、悪魔、山姥などの邪悪な存在が婚姻をたねにして人間をさらってゆく物語、の以上六群の物語が東西ともに存在しつつ、その語り口や解釈に微妙な文化風土の相違があらわれると見るべきだろう。いずれも神と人間とのかかわりあい方の物語で、その神がやがて厄神、邪神となり、動物となり怪物となり、厄介払いすべき、あるいは退治すべき存在となってゆくのも洋の東西にちがいはない。

ここで大切なことは、東西の物語を比較するにあたって、このような六種の種別階梯があることを認識し、他のレヴェルでの物語の語られ方にも注目しながら、原則としては同一レヴェルの物語同士で比較すべきだということだ。この六つの階梯は、いずれも〈神〉とかかわっている物語で、人間中心の純然たる本格魔法昔話においては、また別様の語り方がされる。それが「白猫」や「蛙の王さま」のばあいで、魔法変身のでてこない「青髭」は、鬼や悪魔といった〈異人〉との接触の神話的伝説である。

そこでつぎの問題は、その「白猫」や「蛙の王さま」の対応型をわが国の昔話にさがすことだが、[40]そうなるとわが国の「昔話」の総体と西欧のメルヒェンとの文化的な相異のほうが浮かびあがってくることになる。わが国の昔話は神との接触の記録で、西欧のメルヒェンは、いつのころからか、きわめて人工的な娯楽性の高いつくりばなしになっている。

そしてさらにそのつぎには文学のレヴェルでの同一モチーフの比較がなされ「蛇性の淫」や「熊男ロキス」が登場するのだが、[41]ここでもやはり、近代小説とそれ以前の怪談や、あるいは探求の文学と娯楽の猟奇小説といった種別の区分が必要になってくる。そのさいには、類話はいくらでもあるようでも、ジャンルと話型を同一にした、比較の可能な話はそうは多くはない。

たとえばメリュジーヌは「見るな」の禁忌を主にして考えれば豊玉姫説話か魚女房に近いが、始祖伝説としては長野の小泉小太郎譚で、このばあいは蛇聟である。

申し子譚では一寸法師や親指小僧の系統が東西で似た語り方をされるが、「田螺息子」と「蛇の王子」では、申し子が愛の力で変身を解かれるというモチーフ以外にはあまり似ていない。たとえば田螺息子の麦粉菓子の策略などは、対応するものを「蛇の王子」の中に見出すことは困難である。形の類似だけなら、わが国でも蛇の申し子譚はある。鉢に入れたら鉢の分だけ大きくなり、臼に入れたら臼の分だけ大きくなって、しまいには家に置いておけなくなって山へ放す話だが、ここには西欧の「蛇の王子」のような嫁とりのモチーフも、人間への

変身のモチーフもない。

人身御供譚は東西に数多く、龍退治と猿神退治が対応するとされているが、怪物がいけにえをさらっていって女房にしている話では、「奪われた花嫁」と甲賀三郎譚が対応するほか、猿聟の里帰り型や、犬聟の一部が、女をさらった異類と女との婚姻生活を描いている。ただしわが国では第三者による救出のモチーフはない。

最後のやはり邪悪な存在による、略奪婚ではなく謀略婚では、わが国の「食わず女房」と西欧の「青髭」がある。しかしこれも異類女房と異類聟だし、押しかけ女房が夫をさらってゆくのに対し、「青髭」では往々にして、娘のほうが悪魔の城へ出かけてゆく。また悪魔の城からの逃走には支度に手間どるモチーフが使われるのに対し、「食わず女房」では、木の枝を伝って逃げだして、よもぎと菖蒲のあいだに隠れるといった相異がある。[42] また、その名前のもととなった「物食わぬ女」というモチーフは妖精女房などでもまず見あたらない。[43]

「青髭」以外では「踊りのうまい悪魔」があり、ケベックで好んで語られているが、アイルランドやスコットランドのケルト系の伝承では妖精の踊りの輪に巻きこまれる話になっている。これはAT306番の「踊る王女」にもつながっている。王女が夜な夜な姿をくらます。そしてはいている靴が異常にすり減る。あとをつけてみると地底の世界で、異界の住民たちと一晩中踊りあかしている。悪魔と踊ると明示されるばあいもある。伝説ならサバトの宴に赴いて悪魔と交わってくるところだ。そうなったきっかけはふつう語られないが、伝説なら悪魔との契約であり、昔話なら悪魔の申し子だろうが、「踊りのうまい悪魔」の系列とすれば、見しらぬ男に誘惑されて教会の禁じた日に一夜踊りあかしていらい、悪魔の花嫁になってしまったというところかもしれない。いずれにしても悪魔と踊った女は、死ぬまで踊りつづけなければならない。それを遍歴の少年(あるいは軍隊をやめた兵隊)が救うのだが、わが国では「猿聟」でも「食わず女房」でも、当事者が自分で難局を打開する。

もっとも、悪魔にとりつかれて悩んでいる娘を見知らぬ流れ者が救って嫁にするというモチーフは、見知らぬよそ者が娘に踊りを申しこんでそのまま、踊りながら地獄へさらわれていったという話の裏返しである。裏返しであっても、見知らぬ流れ者が娘を嫁にするという構造は同じで、悪魔と流れ者は同一人物の二面であるとも見られる。悪魔にとりつかれた状態を脱け出るのは娘自身の問題である。あるいは、はじめは怪物か悪魔であると思っていた相手が、人間性のある優しい夫であることに気づくかもしれない。と言うのは、西欧の異類婚説話で、わが国のそれと根本的にちがうのは、主人公の成長の問題である。相手が異類であれ、あるいは人間であれ、旅に出た主人公は怪物を退治してひとつの関門を通過し、その後、さらに一年の遍歴を経て人生経験をたしかにして花嫁の前に姿をあらわす。そのさいに、自分自身を証明する証拠の品を出すことを忘れてはならない。

娘のほうでも、怪物の嫁になって地底で救助者が来るまでの試練の年月を耐えるのだ。女の受難と試練の物語としては、ジュヌヴィエー

ヴ・ド・ブラバンや手無し娘の原型である「グリゼリディス」がある。「マリアの娘」も同様な試練を経て自己の完成に到達する物語だ。ヨーロッパの昔話は、みなし子が一人で人生を切り開いてゆくうちに、人格の完成に至るところを描くのに反し、わが国のそれは、神話のレヴェルを脱しきれないせいか、主人公は積極的な行為は何もしないで寝て果報を待つ。[44] 異類婚説話でも、日本の男は配偶者を得るための積極的な努力を何ひとつしないことが多い。せいぜい「物食わぬ女房」がほしいと願うか、あるいは動物がいじめられているのを救ってやるくらいである。異類や天人のほうでは、その甲斐性のない男を見るに見かねて押しかけ女房としてやってくる。押しかけてみたらべアリュの『水蜘蛛』のようにすでに本妻がいたという話は日本の昔話にはない。「隣りの爺」型の昔話が老人夫婦という非ヨーロッパ的な主人公を設定しているだけではなく、「炭焼小五郎」や「物臭太郎」のように、どんな女にも相手にされない甲斐性のないアンチヒーローをめぐる物語群を持っているという点でも日本の「昔話」はユニークである。なお、「三年寝太郎」に相当するヨーロッパの話型は「二十になるまで母乳を飲んでいた男」で、「熊のジョン」の類話の怪力譚である。

以上の概観から結論を引き出すのは早いが、いずれにしても、似た話をひとつふたつ拾ってきて、そこから文化の比較をするのは危険であることだけはたしかだ。むしろそれよりも、あってしかるべき話型の欠如にこそ注目すべきである。もちろん、それもより網羅的な調査を行えば類話が出てくるかもしれないが、稀な特異例は文化の比較では無視していいだろう。もうひとつはやはり話型の文化的発展には注意しなければならない。神婚譚はヨーロッパでは早い時期に人間中心の魔法昔話に置きかえられる。神の働きのかわりに人間の文化をあらわす魔法が奇蹟を行う。そして、そこでは、少年が配偶者を得、老いた支配者にかわって支配権を手にするまでに、異界行や〈汚れ〉の試練を経る。広く言えば、一旦、死んで、王として再生するのである。配偶者は異界行のあいだに見つけても、〈汚れ〉のあいだに結ばれても、異類であり、あるいは帰還後であってさえ、身分のちがいによって広義の異類性を持っている。西欧のメルヒェンは、自分の生い育った環境を出て、ちがう世界の配偶者を得て、別の人格を獲得するというイニシエーションの階梯を物語化しているものが多いが、わが国では、少年より老人が多く、配偶者も獲得するよりは、向こうからやってくるのを寝て待つことが多く、その配偶者が去ってゆくときもただ手をつかねて見送ることが多い。神であるまれ人と接触しても、それによって富を得ることはあっても、人間としての成長や人格の変化をもたらされることは少ない。変身のみならず、変化成長の要素が少ないのだが、ある点ではそれは彼我の物語の「長さ」にも依存している。西欧の昔話はわが国の断片的な短い昔話にくらべるときに人の一生を語る「長編」である。わが国の物語は「事件」を語り、西欧のそれは人の一生を語る。

西欧の物語は、その少年の成長を、魔法と変身と、冒険と婚姻のモ

チーフによって語り、わが国の昔話は、神の来臨の「事件」を、おそれと敬意をもって語る。ただし、そこでは「昔話」の総体の発展過程上の相異があり、わが国のそれは西欧の人文主義的なメルヒェンよりはるかに自然神崇拝の神話に近い。それでも個々の話型では、欠如の相も含めて、東西で比較しうるものもあるだろう。「食わず女房」と449番のフランス型などがその例であることはすでに見た。そのような例を今後はほりおこしてゆくことになる。(45)

注

(1) 河合隼雄『昔話と日本人の心』岩波書店一九八二。
(2) 小沢俊郎『世界の民話』中央公論社、一九七九。(及び雨宮裕子『異類婚の論理構造』「昔話の構造」名著出版。)
(3) 同右
(4) 河合前出書他。小沢は前出書で「動物と人間との間を近く感ずる動物観が古く身についておりながら、他方では動物との結婚など身の毛もよだつように感ずる日常的感覚があって、そのためにこのような強い拒否が昔話のドラマを形成する」(一八三頁)と言う。
(5) AT401「呪われた王女」の類話。動物に変えられた王女は、魔法の城で旅の兵士が三日三晩悪魔と戦うと呪いが解ける。そのあと指定した場所での待ち合わせを主人公が眠りこんで三日つづけて失敗し、王女はふたたび悪魔にさらわれる。この話で、二度の試練がひとつになった形がある。いずれにしても魔法の城での逗留とタブーを守ることが王女を人間にかえる。これはうぐいすの里での逗留と禁忌の遵守に相当する。
(6) 小松は構造分析によって猿聟を分析し、「猿女房」もあってもいいはずだが、伝承からは脱落している点に注目すべきだと言っている。「猿聟」があれば「(西洋)龍聟」があってもいいというのは、それほど飛躍はしていない。ただし「龍聟」と言っても、人間に変身して来る「蛇聟」型の話を想定しているのではない。人身御供を要求するアンドロメダ型の龍蛇神が神性を失って、雨をもたらすかわりに花嫁を要求するというシナリオだ。
(7) 第四十一話「女人、大蛇に婚はれ、……」
(8) 沢田瑞穂『中国の伝承と説話』研文、一九八八、七五頁。
(9) カゾット『悪魔の恋』はドン・カルメらの説くシルフと人間の交婚の信仰のヴァリエーションである。ゴーチエの『死霊の恋』はそのカゾットの展開である。
(10) 死者はもっとも強い異類性を持っている。その死者との関係では、410番の「眠り姫」自体が、ペローに先行するバシーレのテクストによると、王子が眠り姫と交わって妊娠させている。〈眠り姫〉は、その〈眠り〉と、〈横臥位〉によって、死と性、拒否と受容を同時に示している。
(11) 大森郁之助「食わず女房の種姓」、『昔話と民俗』名著出版一九八四、では〈ワギナ・デンタタ〉のイメージの転置とした上で「異類婚・神婚における畏怖感の極度な演出」(二四四頁)と見ている。
(12) 小沢、前出書、あるいは『昔話と動物』「昔話—研究と資料」十一巻、三弥井書房、一九八二
なお、松前健は、「英雄神の世界的範型と日本文学」で、世界に共通の範型と言うものも「古典的世界についての範型であって、アフリカ(……)の、いわゆる原始民族には適用できない」(『古代信仰と神話文学』一九八八)と指摘している。また三品彰英は『日本神話論』一九七〇で「神話」を原始神話、儀礼神話、政治神話、知的神話の四つに分けているが、エスキモーの「昔話」は昔話より神話、それも自然神話に近く西欧のメルヒェンとは比較できないだろう。
(13) 性急であると言うのは、猿婿と「美女と野獣」をとりあげたときに、

その双方が原神話から等距離にあるのかどうかについての検証が省かれているからだ。「美女と野獣」はオーノワ夫人の再話が名高く、純粋の口承話が採集しにくいだけではなく、猿聟譚が田畑を耕作する農民文化をあらわすのに対し、「美女と野獣」は娘の父親が商売で旅行をするのが発端となっているように商業文化、都市文化をあらわしている。後者が、文学的色彩にしても都市文化の諧調にしても、はるかに人間中心文化の傾向を持っていて、前者が自然神との交渉の痕跡をとどめていることは明瞭で、「美女と野獣」でも、より自然神話のレヴェルに近い類話を拾うことができれば、猿聟とのより正当な比較がなしうると思われる。ヨーロッパでも農民たちの語りの中には農作業をめぐる異類、とりわけ悪魔との交渉の物語が伝えられている。

(14) もちろんわが国でも呪法はある。しかしここで言う「魔法」とは昔話の中で悪魔や魔法使い、あるいは妖精が使用する変身変態術である。わが国では「魔法」の前に悪魔や魔女自体がいない。もっとも山姥はときとして西欧の魔女に近い行動をする。「食わず女房」の山姥は美女や蜘蛛に姿を変じることができる。また「旅人馬」の伝承では人が馬に変えられる。ただし、それがほとんど唯一の「魔法変身」の例である。

ヨーロッパの〈昔話〉は「魔法物語」ないしは「妖精物語」と呼ばれる。ところが、その魔法も妖精も、ともにわが国には存在しない。悪魔や人食い鬼だけはそれに相当する「鬼」がいて、「鬼昔」というジャンルがあるが、この「鬼」も、打出の小槌の類の呪物を持っているほかは、特に変幻自在なわけではない。ただし、このばあいも、伝説や文学的説話では鬼には変幻自在ないわゆる〈鬼神力〉がある。

(15) 前出書一九三頁

(16) 以下『日本昔話大成』第二巻角川書店。一九七八。

(17) 永田典子「『猿神退治』の特性」『昔話と動物』前出、他。

(18) 犬は龍退治、猿神退治で活躍するが、「花咲爺」以外昔話ではあまり出てこない動物である。なお、猿をイヌと呼んだり、犬神なるものが人に憑くと信じたりすることは日本だけのことである。

(19) 川村俊理『タイの異類婚姻譚』は、バナナの精に惚れた男の話を紹介している。(『昔話と動物』前出)。ここでは中国のものとはちがって、木の精に死霊などの超越性は認められない。木の精(ハマドリアデス)はギリシャ神話にも存在するし、アポロンの求愛をのがれようとしたダプネが月桂樹になる話もある。また、植物が美しい女になって騎士たちを誘惑する話はフランス中世の『木陰の物語』にもある。そして現代のテクストではモニック・ワットーに『植物の怒り』一九五四がある。

(20) 白鳥乙女はヨーロッパから東南アジアまで分布しているが、日本でだけは白鳥(スワン)の形ではほとんど聞かれない。そのかわり、東南アジアにもある羽衣＝天人説話になるとされているが、鳥という動物相にこだわれば鶴女房が日本版の白鳥乙女である。

ヨーロッパの白鳥乙女は313番「悪魔の娘」400番「失踪した妻の探索」、465番「未知のものの探索」にあらわれるが、とくに400番では、異類が人間の姿でやってくるが、夫がタブーを犯したために妻がもとの姿になって逃げ去る話で、変身や旅の方向性は鶴女房と変わらない。西欧の〈昔話〉では一般に少年の異界探険冒険譚が多く、わが国では、神の来臨を待ち受けるタイプが多いが、婚姻譚として、日本だけの特異性を持った語りがあると考えるのは困難である。一般にわが国の昔話では別れがあとを引かないのはたしかだが、配偶者が異類になって去ってゆくのは、白鳥乙女でもメリュジーヌでも、あるいはダプネでも同じだ。

(21) 猫女房と呼ばれるものは採集例が少ない。が、田螺息子と並んで、変身が一回性であり、かつ別離をともなわない幸せな結婚に到達する点

で、小沢の図式の反証となるものだ。猫にしても狐のように自由に姿を変える化猫がいて、そこに婚姻モチーフが加われば狐女房になるが、そのような話は猫女房としては語られない。水神、穀霊系の動物が神となるのに対し、猫や狸、狢は妖怪としての性格が強い。

(22) 稲田浩二編『昔話の年輪』筑摩書房、一九八九

(23) 「馬聟」という言い方はされてはいない。事実馬は、「聟」として認知されるまで至らずに殺されてしまうからだ。しかし、馬が娘に心を寄せる話のばあい、幼い娘の用便の始末を馬にさせながら、大きくなったらおまえの嫁にやろうと言っていたのを聞いていて、そのつもりになっていたというのが多く、これは犬のばあいと共通している。また今野円輔は、「神のこの世に賜わるべき、蚕に化身すべく約束された神聖な馬（……）と、人間の種ならざる申し子の姫との間の交渉は」「神が聖なる処女を娶った」神話であると説く。（『馬娘婚姻譚』岩崎美術社、一八三頁）。

(24) 臼田甚五郎『食はず女房その他』桜楓社一九七二。

(25) 稲田編前出書六七頁

(26) 沢田瑞穂『中国動物譚』他
なお韓国では熊が女になって猟師と結ばれる話がある。（崔仁鶴『韓国昔話の研究』弘文堂一九七六）ほかに同書では鼠の妻になった女の話などが珍しい。

(27) ジュヌヴィエーヴ・マシニョン『カナダ採訪記』一九四六他。

(28) ドンタンヴィル『フランス神話』他。

(29) コラン・ド・プランシー『地獄大辞典』、ドン・カルメ『霊鬼大全』他。

(30) 小沢俊郎『世界の民話』解説編ぎょうせい、一九七八、一〇九頁。

(31) 以上、「龍退治」には龍退治そのものである第一試練、そのあとの遍歴の旅の第二試練そして、最後に自分が自分であることを認知してもらう第三試練がある。この最後の試練は「甲賀三郎」なら旅のあいだに身につけた蛇の姿からの脱皮にあたる。西欧の物語でも、遍歴は必然的に異界行であり、しかるべき痕跡を遍歴者に与える。そこで通例王女は、自分の救出者にすぐには気がつかない。それ以上に、遍歴者があえて自ら〈汚れ〉をまとって変装することもある。〈ロバ皮〉、〈姥皮〉のたぐいで、これを被るのは女とはかぎらない。カナダには〈鱈皮〉を少年がかぶるものがある。「しらくも」（AT314）も少年が豚のぼうこうを被る。
第二の試練は龍に象徴された父親殺しのあとの物忌みの期間である。第三の試練の「灰かぶり」も喪をあらわすと考えうる。と同時に、それは少年の異類性の象徴でもある。その異類の仮面をかぶった少年が王女と結ばれる。これも異類婚である。
結局、異類婚には一、本物の異類との結びつき、二、魔法変身による動物の姿をまとった人間との結びつき、三、仮面によって動物に変装した人間との結びつきの三種があることになる。

(32) 「呪われた王女」としては401番のほうが代表的であり、ほかに480Bにも、「呪われた城」は出てくる。
401では旅の兵士が呪われた城に泊まって三晩つづけて試練に耐えると、王女の呪いがとける。しかしそのあと、今度は王女によって課された試練に三日つづけて失敗して、ふたたび王女を失い、ガラスの山までさがしに行く。

(33) オラン編の『ガロ地方の昔話』に収められた「蛙の結婚」では、娘は蛙の申し出を受け入れて、蛙の国で蛙の女王としてしばらく生活する。なお、この物語は、年とった父親にあるとき蛙が若返りの秘術を授けるかわりに娘をくれと申し出るところからはじまる。父親は家へ帰って煩悶する。三人姉妹の末娘が嫁に行くことを承知する。しばらくして蛙は

一週間の里帰りを認める。ここまでは「猿聟」と完全に同じである。ちがうのはそのあと、娘の実家に隠れてついてきた蛙が、娘の気持ちが依然として蛙になびかないのを見てとって、結婚を解消する。そのさい何でも願いのかなう棒をくれる。その後、その棒で建てた城に押し入ろうとする悪者を退治したところが蛙の魔法が解けて美しい王子になる。

フランスではグリム型の「蛙の王さま」は採集例が少なく、「蛇の王子」のほうが多い。蛇のばあいは申し子であり、その行動は「青髭型」である。

(34) 「白猫」型の昔話をわが国に求めるのは難しい。「猫女房」は、猫が女になって幸せな結婚をする点は同じだが、魔法は働かない。「田螺息子」にも魔法はない。化猫譚である「鍛治屋の婆」は猫が人間に化けていた例であり、このあたりを捜すと、たしかに、日本では異類が人間に化けてやってくる。これは、人間が異類に姿を変じている西欧の話の逆にはちがいない。転生譚は別であるとしよう。

(35) ここでは通例三種の品物が出てくるが、多くは紡錘、つむぎ車など、糸を紡ぐ道具や織機である。これは鶴女房のふしぎな機織りにも通じる。先進の紡織文化を持った異民族との接触の驚異の記憶をそれはとどめているのだろうか？　あるいはアマテラスないしその織姫が梭をホトにつきたてて死ぬとか、〈眠り姫〉が紡錘を手にさして百年の眠りにつくと言うように、紡織機に死と生の往来を司る呪的な力が認められていたのだろうか？　ノディエの『スマラ』に〈ロンブス〉なる紡錘が魔術で使われるという記述があるのが思いだされる。

糸を紡ぐ女の神格化としてはギリシャの運命の女神パルカも思いだされる。

三種のふしぎな品では、「シンデレラ型」の物語ではくるみの殻の中の銀の衣、金の衣、時色の衣があり、「白猫」でも、一番薄く美しい布地が小箱の中からとりだされる。わが国の蚕神信仰とともに、織維文化のもたらした驚きが読みとられよう。

(36) 異類女房は忘れられた夫に思いだしてもらうために三日三晩の試練を必要とする。それは呪いにかけられた王女を解放するために必要とされた三日三晩の試練と同じである。異界間の障壁、あるいは異類間の姿の相異は、三日三晩の試練によって越えられる。甲賀三郎も地上に帰ったときの蛇身を脱するためにしかるべき変身試練を必要とした。あるいは女の側の論理で言えば、少年のほうに魔法がかけられていて、その魔法を三日三晩で解くのかもしれない。

(37) 青髭はなぜ青髭なのだろう。青い髭というものが、人間としてはありえない異相であるなら、それは異類をあらわす記号でもあるかもしれない。化けそこなった狸。しかし、「金色の髪の少年」を見ると、こちらは同じ毛髪の異常だが、悪魔の申し子の記号とされている。青髭も「美女と野獣」のように、悪い妖精の性のおとしあなにかかって、呪われたのかもしれない。いらい、蛇の王子のように女たちへの復讐を誓ったのかもしれない。真実の愛で報われるまでは。

なお、青髭退治は「犬を連れた兄弟」による巨人殺し、龍殺しである。龍退治、猿神退治にはほとんどつねに犬が登場する。「青髭」にも犬が出てくる。

一方、消えない血のしみのモチーフは、「金色の髪の少年」や「マリアの娘」では金の泉に浸した手が金色になるモチーフである。もうひとつ、「見るなの座敷」は「うぐいすの里」だ。青髭も娘が言いつけを守っていれば真人間に戻ったのかもしれない。

(38) 「天つ神はほとんど人態的であるように見えるが、国つ神系の神々は動物的形態のものが多い」（松前健『古代信仰と神話文学』弘文堂、一九八八、二五頁）という分け方もあろう。

(39) アンドロメダ神話型の怪物はおおむね水神としての龍である。龍蛇神に無理やり妻にされていた王女を救う話は「巧みな射手」、「身体の外の心臓」、「食われた花嫁」等々と数多い。龍は物語の中での機能としては、殺害者としてより性的略奪者の性格が強い。

(40) 魔法変身はどうしても西欧の昔話の特異性である。例外は人馬変身譚（「旅人馬」）と人虎譚（『山月記』）、あるいは「夢応の鯉魚」だが、魔法によって自由自在に姿を変えることは稀である。すくなくとも人間は、日本では死後転生以外、姿を変えることはない。狐狸の類、化猫の類はたしかに姿を変えるが、本来、多形神である自然神の仮の姿がその狐や蛇であって、神であれば顕現であって変身ではない。人間と神の中間に山姥があって、これはよく姿を変えるが、これも、異類が異界から人間に化けてやってくるので、人間が動物になるわけではない。もっとも、この山姥を西欧型の魔法使いであるとすると、たとえば山姥に与えられた「姥皮」をかぶると汚ない老人に変身するというのもよく理解できる。西欧では〈ロバ皮〉も〈千匹皮〉もあるいは〈熊皮〉も、それを被って人の目をくらませはするが、それは〈汚れ〉の試練で、変身があったようには語られない。ところが日本の姥皮は、本当の魔法変身が起こるように語られる。そして、〈姥〉に変身したままで、長者の息子に見そめられて結婚する。ちなみに異類婚の四つ目のカテゴリーが、この仮面による変身のばあいである。ロバ皮をかぶった王女とふつうの王子の結婚、悪魔との契約で熊皮を着て、熊男とあだなされた男と娘との結婚、そして、わが国の姥皮をかぶった男女の結婚、あるいは鉢かつぎがそれである。

(41) 近代の異類婚説話ではマルセル・ベアリュの『水蜘蛛』が思いだされる。あるとき水辺を歩いていると水蜘蛛が呼びかける。それをつまんで持ち帰ると、蜘蛛は日ごとに大きくなり、やがて一人の少女に変身する。妻との葛藤の末、少女をもとの水に戻そうとすると少女はふたたび蜘蛛になって主人公にからみつき、水の中に一緒に落ちてゆく。エーヴェルスの『蜘蛛』、エルクマン＝シャトリアンの『蛛蜘蟹』などもある。

(42) よもぎと菖蒲のモチーフはもちろん「蛇聟」と共通する。しかし、正体を見られた山姥は去りぎわに桶をもらって行くと言い、その桶に男をほおりこんでかついでゆく。この桶をかついで山へ行く強力のイメージは、臼を背負ってゆく猿聟の姿に重なる。山姥の怖ろしさには猿神に通じるところもある。猿は臼をかついで谷川を渡るときに藤の枝をとろうとする。山姥にさらわれた男は途中で下がってきた木の枝につかまって脱出する。

(43) AT449「妖精女房」は、「昔、妖精と結婚した男がいた。彼女はふしぎなことに、一日にスープを一杯飲むだけだった」という語り出しではじまる。（ドラリュ＝トゥネーズ『フランス昔話カタログ』Ⅱ、一二〇頁）。彼女のあとをつけてみると墓場で死人を食べていた。見られた女は亭主を魔法で犬に変えてしまう。コルシカでは「リザネーゼの妖精」が背中に口をもっている。他に、人狼譚、吸血鬼譚に類話がある。ただし、フランス以外では、「妻が夫を犬に変える話」として伝えられ、冒頭のモチーフはない。

(44) 「桃太郎」はたしかに少年の生い立ちと、異界行と、怪物退治を物語る。が、多くは婚姻のモチーフを欠いている。これが柳田や石田英一郎の説くように海神小童の来臨の形であるなら、成長や婚姻のモチーフはむしろあるほうがおかしいかもしれない。たとえば河童に少年時代、壮年期、老年期などを考えることが困難であるのと同じだ。

(45) 以上の概観でも、正確に相同性を持った資料の対比をしているとは言い難い。たとえば425の類話と見られる「おおかみと王女」（『世界の民話・南欧編』ぎょうせい一九七八）では、狼と王女のあいだに子供がで

きる。もっとも夜のあいだに姿を見てはいけないというタブーがあり、タブーを破って見ると美しい王子である。このばあい人狼型の魔法変身は一定期間の試練のあいだ、夜間の人の姿を見られなければ解除されるはずだった。

この話のばあい、異類は魔法が解けてから幸せな婚姻をするという425のパターンに必ずしも一致しない。そして、昼だけ獣身で夜は人間の姿で人間と交わるのは、わが国の三輪山説話である。「異類聟」のまとめで、関敬吾は、「異類は昼は本来の姿をとり、夜は人間の姿をとる」（『大成・2巻』）と要約しているが、この話はその要約に合致する。

ただし、これは一般の425の話にくらべて「アモールとプシュケ」の原話に近く、神婚譚の色彩が強い。変身も昔話的な魔法変身より、伝説的な人狼変身である。それでも、この話を425の枠から外ずすことができるかどうかは疑問である。夜だけ、あるいは昼だけの変身のモチーフは、この話以外にも多いからだ。また日本の「鶴女房」などでも、人界に逗留していたあいだは鶴は終始人間の姿をしていたかと言うと必ずしもそうではなく、むしろ周期的に鶴の姿に戻って「機を織って」いる。

つまり、このヴァリアントは他の話との接触で崩れた特異型で、425系の話の基本型を考えるときには排除していいのか、それとも、類話を多く持った亜型としてとりあげるべきなのかということだ。

たとえば「猿聟」で、異類との婚姻は否定されると言えば、婚姻生活の成立している「里帰り型」を読み落としていることになる。そして地方によっては、この「里帰り型」のほうが多い。しかし、夫婦には子供ができて幸せに暮らしたというヴァリアント（『大成・2巻』九四頁、『磐城地方昔話集』より）は、他の話の混入か、姥皮型展開の後半部の短絡かと見られる。

ほかに本編ではあげなかったがロレーヌ地方の話で「ふしぎな小ねこ」と言うものは、わが国の「鶴女房」と同じ動物報恩譚で、助けた猫がある日いなくなったあとには、いつまでもなくならない毛玉が残される。婚姻モチーフの有無をのぞけば「鶴女房」とまったく同じと言っていい。対応話型がひとつもない話はないと言っていい。